**令和４年度「未来を創る学力向上支援事業」　第１回学力向上検証会議　記録**

**１　開会行事**

**＜挨拶＞大分県教育庁教育次長　内海**　**真理子**

○　大分県の学力について

・全国学力・学習状況調査…コロナ禍にあって学力は一定水準保障

・大分県学力定着状況調査…一部教科で新たな課題

○　重点的取組について

・「新大分スタンダード」を意識した単元構想による授業改善の一層の推進

・小学校教科担任制や中学校学力向上対策３つの提言等、授業の質の向上に向けた組織的な取組の一層の推進

**２　説明「令和４年度大分県学力定着状況調査の結果、全国学力・学習状況調査の結果等について」**

**＜説明＞大分県教育庁義務教育課　学力向上支援班　課長補佐　桐野　潤**

**（1）結果概要**

①　県調査　質問紙調査結果の推移「勉強が好き」「勉強が分かる」（H25-R4）

|  |
| --- |
| ・「教科の勉強はどのくらい好きですか。」の質問について、小学校は社会と外国語の肯定的な回答の割合が増加。その他の教科は減少。中学校は数学と社会の肯定的な回答の割合が増加。その他の教科は減少。  ・「教科の勉強はどのくらい分かっていますか。」の質問について、小学校は肯定的な回答が横ばい。中学校は理科、数学、社会の肯定的な回答の割合が増加。その他の教科は減少。 |

②　全国調査　児童生徒質問紙調査の結果

|  |
| --- |
| ・（国語）「授業の内容はよく分かる」と回答した児童生徒について、全国値と比較すると、小学校では2.0ポイント多く、中学校では同程度となっている。  ・（算数・数学）「授業の内容はよく分かる」と回答した児童生徒について、全国値と比較すると、小学校では0.9ポイント多く、中学校では4.9ポイント少なくなっている。  ・（理科）「授業の内容はよく分かる」と回答した児童生徒について、全国値と比較すると、小学校では0.2ポイント少なく、中学校では0.5ポイント多くなっている。  ・（授業改善）「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」の項目については8割近い数値となっている。  ・（キャリア教育関係）「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童生徒は、全国値と比較すると、小学校では1.1ポイント少なく、中学校では1.2ポイント多くなっている。経年で見ると減少傾向となっている。  ・（家庭学習）「家で自分で計画を立てて勉強する」と回答した児童生徒は、全国値と比較すると、小学校は0.4ポイント少なく、中学校では1.4ポイント少なくなっている。 |

**（2）結果分析**

①　学力調査結果より

|  |
| --- |
| ○　小・中学校ともに、「新大分スタンダード」に基づいた授業改善により、児童生徒は一定程度の学力を身に付けている。  ▲　低学力層の割合は小学校では標準を維持しているものの、中学校では増加している教科も見られる。低学力層に対する手立てを講じた授業改善を一層進める必要がある。 |

②　質問紙調査結果より

|  |
| --- |
| ○　質問項目全体を通じて、コロナ禍による大きな影響は見られない。  ▲　「将来の夢や目標を持っている」に対する回答について、経年で見ると減少傾向にある。キャリア教育の充実を図るとともに、自主的・実践的な学習活動を工夫する必要がある。  ▲　家庭学習に関する項目において、経年で見ると減少傾向にある。授業と家庭学習を効果的に連動させた学習指導が必要である。 |

**（3）今後の取組**

①　「新大分スタンダード」を意識した単元構想による授業改善

|  |
| --- |
| ・「授業づくりハンドブック」や「早わかり！単元計画の作成手順」（ともにR2県教委）を活用した実践や研修の充実  ・「授業力向上アドバイザー」による経験年数の浅い教員への指導支援  ・小学校高学年における教科担任制の推進  ・小・中学校英語教育推進校を核とした英語指導力の向上と普及　など |

②　特別活動や体験的な学習の保障

|  |
| --- |
| ・児童生徒が、自分の良さや成長を実感できる活動や振り返りの工夫  ・キャリア・ノートを活用した「目標をもって生きる意欲や態度」の育成 |

**３　協議**

**＜司会・進行＞大分県教育庁義務教育課長　武野　太**

**（1）「大分県学力定着状況調査の結果（英語）について」**

|  |
| --- |
| ①　中２英語の愛好度や理解度の減少として考えられること  ・コロナ禍の影響によるコミュニケーション活動の制限  ・小中の学びが円滑に接続されていない  ・授業展開の固定化  ②　対策として考えられること  ・目的や必然性を持たせた授業づくり  ・教科部会の充実や活性化  ・ALTや外部人材、英検等の活用  ・合同研修、乗り入れ等による小中連携の強化 |

**（2）「加配教員の活用状況について」**

|  |
| --- |
| ①　授業力向上アドバイザー（AD）について  ・経験年数の浅い教員への指導ができており、高い効果を感じる。人選が非常に重要である。ただ、欠員が生じるとADのミッションが止まることもある。また、中学校教員への指導については、教科の専門性が求められるため、指導が難しい状況もある。  ②　小学校教科担任制のための専科教員について  ・専科教員が配置されている学校では、空き時間が生まれ、複眼的な児童理解もできるなど、様々な面で効果を感じる。また、専科教員は保護者や子どもにも好評である。ただ、算数と理科に教科を限定されると、適任者を選びにくいなど運用しづらい面もある。  ③　その他の加配について  ・中学校習熟度別指導推進教員については、ICT活用において好事例を発信できている。  ・3つの提言推進拠点校教員については、授業改善が進んでいるが、次年度以降どうなるかの危惧がある。 |

**（3）協議のまとめ　義務教育課長　　武野　太**

|  |
| --- |
| ・コロナ禍の影響もあってのことだろうが、外国語教育における小中の連携した取組の実施割合が減少（R1：78％ ➡ R3：65.3％）している。文部科学省が実施する「英語教育実施状況調査」において、小中連携と学力には相関関係があることが示されており、連携を強化・推進していくことが大切である。  ・英語についてはALTをどう活用するかを考え、コミュニケーションの場を工夫してほしい。  ・学校マネジメントの面から今回の「英語に対する愛好度」のデータを今一度、捉え直すことが必要である。今年度の結果と現在の中２が過去に行った調査結果を比較・分析することで、愛好度が大きく減少した時期や要因が分かる可能性がある。また、校内の授業アンケートの結果から英語が好きな学級とそうでない学級の相違点が見つかる可能性もある。学級間の学習意欲に差を生まないためにも、各学校の校長には校内の授業観察を積極的にしてもらいたい。今日の協議の内容を踏まえて、調査結果とアンケート結果の分析を、ぜひ市町村教育委員会から各学校へ伝えてほしい。 |

**４　指導講評**

**＜指導・助言者＞大分大学名誉教授　山崎　清男**

・「新大分スタンダード」の単元構想は非常にレベルが高く、これまでの結果から見ても大分県の児童生徒の学力は身に付いてきている。

・教員の組織力（ベクトルの揃ったプレイヤー）が重要で、この組織力が児童生徒の集団づくりや基礎学力の向上に寄与する。

・今後、大分県の学力をさらに上げて行くには、これまで取り組んできた方向性をどのように変えていくかが大切となる。管理職の意識改革や財政上の保障等、色々な方向性が想定される。

・ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」に着目する。口で言うのは簡単だけど、こういう理論を頭に入れ取り組んでいくことも重要である。